

視界360度の特等席

福岡市南区 牛嶋 健二

風景をぼんやりと眺めるのが好きだ。特に日の出や日の入り前後、時々刻々と変化していく風景を眺めるのが私は好きだ。私の住まいから赤いレンガ敷きの高宮遊歩道を10分程登ると、平和南緑地保全地区の北入り口に着く。ここからは腐葉土混じりの土の道に変わる。スニーカーを履いた足先から伝わってくるレンガの硬い感触から、温かみのある柔らかい土のふわふわした感触への変化が楽しい。その土の道をさらに5分程登るともう高宮浄水場裏手の展望台である。そこから屋上まで90段ほどのコンクリートの階段があるが、急勾配の坂道を15分ほど登ってきた後だけに、この階段が結構きつくて息がはずむ。でもその後は絶景というこぼろびが待っている。

この展望台の屋上に立つと、福岡市全体が一望のもとに見渡せる大パノラマ



が楽しめる。福岡市広しといえども、身体をぐるぐると一回転させるだけで、市街地全体が360度見渡せる場所はめったにないのではないだろうか。たかだか10平方メートル程度のスペースしかないが、そこには私の特等席である。

例えば日の出。太陽が東の山の端から徐々に顔を出すにつれ、モノトーンの山水面の風景が刻々とカラーの世界に変化していく。そうこうする内に、高宮浄水場の庭に敷きつめられた草がまるで緑のじゅうたんのように眼前に鮮やかに浮かび上がってくる。朝一の航空機が次々と青い空を斜めに切り裂いて飛び立って行く。街の目覚めである。

例えば日の入り。太陽が西に傾き始めると、白日のもとでは存在感が薄かった建築物の一つ一つが次第にその陰影を濃くしていく。やがて、福岡タワーや福岡ドームをピンク色に染めあげていた陽光は、まるで燃え尽きるかのよう山の端に沈み、グレイ色のシルエットの世界へと変化していく。そして、街はネオンに彩られていく。

木製のベンチが一つ備えてあるが、日の出や日の入りいずれの時でも、私を包み込みながら一瞬一瞬移り変わる景観に目を奪われて、一度も座ったことはない。いわば立ち席だが、かけがえのない私の特等席である。

アクロス福岡
旧福岡県庁舎の思い出

福岡市南区 大庭 実華

明治通り側からアクロス福岡に入ると、シンフォニーホールの入り口の奥に、薔薇の花をモチーフにした丸いステンドグラスが見える。

現在のアクロス福岡の場所には、17年前まで、緑の奥に洋館造りの旧福岡県庁舎があった。丸いステンドグラスは、正面玄関ドアの欄間にあつた半円形のステンドグラスを2つ合わせたものである。

22年前私は、旧福岡県庁舎(大正4年竣工)と旧教育庁舎(明治43年竣工)の外壁を残し、内部を新しい構造で補強し再利用しようという保存再生運動に参加していた。父が県庁勤めで、幼い頃玄関のエンタシスの列柱で遊んだ思い出があり、何よりもディテールに手仕事の跡が残る旧県庁舎に愛着を感じていたからだ。10数名の仲間と事務所を借り、講演会、展示会、新聞への投稿、署名集めと運動は広がり、市民運動が育たない福岡で若者がまちづくりの声を上げたこと珍しがられた。今思うと怖いもの知らずといふ言いがたい。多方面の方々からは



らほらしながら見守ってくださった。昭和56年春に取り壊しが決まり、昭和58年6月、解体工事が始まった。

私は毎日壊される旧県庁舎を見ていた。建物は壊れていく時、不思議な美しさを見せる。建っていた年月とそこで起こった出来事すべてを解き放つように、8月の炎天下、崩れていく旧県庁舎が隅炎の中で一瞬揺らいで見えたのを覚えている。

その後、旧教育庁舎は県公会堂貴賓館として、旧県庁舎の玄関の列柱は、天神中央公園内にモニュメントとして残った。平成7年にアクロス福岡が竣工した頃には、周辺古い建物はほとんど姿を消し、天神地区の景観は一変していた。それから7年。アクロス福岡の近くで働いている私は、毎日のようにステップガーデンを眺めている。愛着とは妙なものである。今では新緑の頃のステップガーデンが、来福した友人への一番の自慢となり、思い出深い旧県庁舎は、玄関にあつた楠の木の色とともに、今でも私の

記憶の中で輝いている。

新しもの好きな博多のまちで、意外にも歴史的建物とその環境を保存しようとする素晴らしい運動があった。都心に自然を蘇らせたステップガーデンを自慢するように、大人が住む都市としてのこの重要な歴史を誇りたい。
(選考委員 西山 徳明)



冒頭で、土を踏み柔らかな感触が甦る。作者の視線は空周と時間の円環を軸にも描いて、足下の1点に収束する。ささやかな日常が映像的に語られ、身体験の臨感に惹かれる。身近な発見と楽しみ方を教えてもらった。

(選考委員 永崎 明子)

